

## 近畿ブロック記念講演

9月10日 大阪キャッスルホテル

## 多様化時代を先取りする先進オフィス

山口重之 京都工芸繊維大学 繊維学部デザイン経営工学科 教授

経営のコンセプトを  
どうオフィスに表すか

これからのオフィスはどうなっていくのか。その答えとなるべく、理想のオフィス像、あるいは一般解が果たしてあるのだろうか。結論を先に言うと、「ない」ということになる。

今までは理想像や一般解があった。しかし、近年、経営環境が大きく変化し、そこにITの進歩が絡み、仕事の仕方も変わってきており、オフィスも当然変わらないといけないう概念さえ危うくなってきている。こういう時勢に、非常にステイックな像として、未来のオフィスを描くことは危険だと思う。

情報通信技術のパワーは我われの仕事のやり方を変えただけでなく、ビジネスのやり方そのものを変えてしまうところまで来ている。

ITの進歩により、価値を創造するという時代の幕が開いた。そうすると、企業はその存在意義を社会にある程度アピールしていかなばならなくなり、経営のコンセプトがワークスタイル、あるいは働く環境の改革を迫る。

先進オフィスとは何か。この問いかけへの一番ナチュラルな答えは、経営のコンセプトにどこまでうまく付いていけるかではないか。それがまず一つのポイントになる。経営という部分にある程度踏み込まないと、これからのオフィスは見えてこない。

今やITは経営のインフラとして非常に大きな存在である。そのITの行く末をまず見ないといけないが、それと関連して、経営がどう動いて

いくとも見ないといけない。これからのオフィス、あるいはワークプレイスを考えると、この辺を見ていく必要がある。

そして次に考えるべきは、働き方の問題。端的に言えば勤務時間や勤務場所ということになるが、さまざまなコミュニケーションのルールに則っていろいろな処理をしていく、そういうやり方を考えていく必要がある。

3番目のポイントは、働き方に対応するようなワークプレイス、つまり仕事の場所をどうするか、である。

今後は、この3つの要因をうまく頭の中に入れて、オフィスづくりを進めていく必要があると思う。

経営がどう考えているか、何を考えているか——経営のコンセプトが、ワークスタイルやワークプレイスに落ちてくるわけである。

さまざまなワークスタイルを考える上で、マネジメントは必要だが、いずれにしても、ワークスタイルとワークプレイスは切っても切り離せない関係にある。

そういったものの上に、企業が社員に求めるものがあり、他方に、ライフスタイルというものがある。「5時から男」とか「ナイン・ツー・ファイブ」という言葉が流行った頃は、ライフスタイルとワークスタイルが縦にパッと切れたわけだが、これからの時代はそうはいかない。なぜ切れないかと言えば、場所と人が一対一に対応しないからであり、時間差を吸収してくれるようなバッファがインターネット上に用意されているからである。

## 先が見えないからこそ面白い

これからは、仕事と遊びの両方を、同時にずっとやっていく人も出てくるかもしれない。いろいろなスタイルが出てくる。ライフスタイルとワークスタイルをどうなじませていくか。このあたりを、経営のコンセプトがどう仕切っていくかが課題になるだろう。

ワークプレイスのデザインも、企業なり組織なりが持っているコンセプトからくる大きな流れで、考えていく必要がある。

ワークプレイスマネジメントは、ファシリティマネジメントの資格を持っている人が行ったり、人の働き具合、環境をモニターしながら整備していくという仕事だが、このワークプレイスマネジメントから入ろうが、デザインから入ろうが、これからのオフィスはますます混沌としてくる。つくったその日から、どんどん秩序は壊れる、姿も壊れる。それがオフィスである。

オフィスはほんとうに止まっていない。これで完成したというオフィスはないのである。

私自身、大学でオフィスやワークプレイスを研究し、たまにはデザインやプランニングをしているが、実感としては、先が見えない。そういう言い方をすると面白くないように聞こえるかもしれないが、先が見えないからこそ非常に面白い。ある意味、さまざまなところに切り口がたくさんある。うまくいけば、宝の山を掘り当てられるかもしれない。そう思っている次第である。